

# 主張

IMF-JC副議長／全電線中央執行委員長 海老ヶ瀬 豊

## 全電線運動とJCCの関わり

IMF-JC副議長に就任し、早くも1年が過ぎようとしています。

そして世間では、いまだ「東日本大震災」の爪痕が大きく残っている状況のなか、復旧・復興に向けて、日本全体が力を傾注し頑張っていると認識しているところであります。そのようななか、今回色々と考えてみましたが、過去を振り返るとともに私のJCCへの思いも込めながら、全電線とJCCの関わりについて話していこうと思います。

### JCCへの加盟

私たち全電線が、IMF-JCに加盟したのが1990年9月ですので、今年で21年が経過しようとしております。

当時の加盟にあたりましては、

1980年から検討がされてきており、各年度の検討結果では、全電線も金属産業の一員として共闘強化は重要であるとの認識は持ちながらも、JCC既加盟産別と比べ組織力量差が大きいことから、早急に結論を求めるのは困難であるとして、友好関係・交流拡大を強めながら、全電線各単組が組織力量を高める努力を行っていくという方向での対応がされてきました。

その後、日本の労働運動の流れは、全的統一を目指して大きく踏み出し、1987年11月「民間連合」が発足し、1989年11月には官・民統一の「連合」が結成されました。「連合」運動の前進に伴い、産業

別組織の再編、大産業別組織への結

集が時代の主流となるなかで、全電線としてもその選択が求められており、そのような状況下にあったことから、長年検討されてきたJCC加盟問題について、1989年度ではJCC加盟を前提に具体的論議がされたところがあります。そのなかでは「連合加盟と二重になるのではないか」「JCCと足並みを揃えた運動が本当にできるのか」「財政負担はどうなのか」など多くの意見が出され、これらの懸案事項については、当時の全電線役員とJCC事務局との間で再三にわたり折衝を重ね、解消していったとのことです。

このような検討を重ねた結果、これまでの経過と連合における大

産別結集の流れを併せ考えるとき、

従来の金属労協との友好関係のみにとどまることなく、その一員として大同団結、共同歩調をとることが、今後の全電線運動の発展に寄与するものと考え、加盟決定がされました。

長い検討期間があったものの、JCCに加盟ができたことは全電線にとって、今日までの運動を見ても分かるように、その時の判断は正しかったものと思います。

### 正式加盟後

これまでも友好関係はあったものの、これからはJCCの一員として、役割と責任を果たしていかなければならなく、特に春闘の取り

組み方も変えてまいりました。JC 共闘として回答指定日の同時期決着に向け、山場の日程配置の変更などを行うとともに、JC 内の他単産に回答方式合わせるべく、回答方式を積み上げ方式から一発回答方式に移行してまいりました。移行当初は戸惑いもあり、私も当時、支部の執行委員でしたが、いままでですと第2回統一交渉のなかで水準示唆があるので、ある程度経営の考え方が分かったのですが、一発回答方式になることにより、最後の回答指定日まで比較になるものが出ず、途中段階では昨年より良いのか悪いのかが分かりづらかったように思います。それまで長年やられてきた方式ですが、その後、一発回答方式が定着することで相乗効果も表れ、組合員の方にも理解が得られたものと考えます。

また、JC 加盟により情報が多く入ってくるのもメリットですが、それに加え個々への仕事の範囲と密度が濃くなり、その分勉強もしないといけないので、その認識と自覚をすることで、単産の力がついたとも聞いております。私も全

電線に来て最初の頃、それを感じるところがありまして、皆さん専門的業務に従事しておりますので、非常に奥深い話を聞くことが出来、それを理解するために自分も調べてみることで、知識が豊富になったという経験がありました。

## 20年たった今

JC 加盟から20年がたち、今まさに私がJCの一員として活動しており、同じかどうかは分かりませんが、歴代の諸先輩方もこう感じていたのかなと思うところも時々あります。

JC の活動での労働界における位置付けは大きいものがあり、それを示すものが春闘回答指定日の記者会見で、今年の春闘では震災の関係で経験しておりませんが、知っている限りではあの報道陣の数がそれを物語っていると思えます。取材を受けたことのない立場としては、ある反面なくなってきたかと思う自分も感じられるところでは。

さて、今置かれている状況は、東日本大震災の影響もあるなかで、

エネルギーの供給問題や原油高に円高、さらには以前から続く超少子高齢化という問題も抱えており、このままでは生産拠点の海外シフトや企業価値を高めるための事業統廃合などにより、雇用が懸念される場所でもあります。こういった問題については、一産別では難しい面もあることから、金属産業全体で取り組んでいかなければならないと考えますので、是非、JC や加盟単産の皆さんと一緒に、精神的に取り組んでいきたいと思えます。それらのことに応えていくには大変なことだと思いますが、それをやりがいと感じることにより、自分により一層磨きをかけ頑張つて

いくことを心に刻みながら、活動していきたいと思えます。

そして全電線はJCの他産別から見ますと規模も小さく、加盟当時の懸念されていた組織力量差が大きいというのを感じるころはありますが、歴史と伝統を重んじながら、小さいながらも組織基盤のしっかりした産別を今後も貫いていき、奇麗事を言うようですが、組合員のために何ができるかを今後も考えながら、JCとともに労働運動に取り組んでまいりたいと思えます。



IMF-JC 副議長／全電線中央執行委員長  
海老ヶ瀬 豊 えびがせ ゆたか

1963年5月31日生まれ、千葉県出身  
1982年 古河電気工業(株)入社  
1989～94年 古河電工労組千葉支部執行委員  
1999年 古河電工労組千葉支部書記長  
2002年 古河電工労組中央執行委員  
2006年 全電線中央副書記長  
2008年 全電線中央書記長  
2010年 全電線中央執行委員長に就任、現在に至る。